

アルヴァックスに対するデュルケームの影響¹⁾

横山 寿世理

1. はじめに

フランスの社会学者であるモーリス・アルヴァックス (M. Halbwachs, 1877-1945) は、1925年『記憶の社会的枠』(*Les cadres sociaux de la mémoire*)と、1941年『聖地における福音書の伝承的地誌』(*La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte*)、そして遺稿『集合的記憶』(*La mémoire collective*)において「集合的記憶」を明らかにした。特に『記憶の社会的枠』と『集合的記憶』からは、ベルクソンの記憶論への批判を超えて、デュルケームの集合意識もしくは集合表象からの影響を受けていることが読み取れる。

第二次世界大戦終結の1945年にブーヘンヴァルト強制収容所においてその生涯を閉じたアルヴァックスの集合的記憶論への関心は、彼の没70年を過ぎててもなお廃れていない。また、今年2017年は、そのアルヴァックスが影響を受けた社会学の祖デュルケームが没してから100年になる。

そこで、本稿では、そのアルヴァックスに対するデュルケームの影響について取り上げてみたい。

アルヴァックスは、デュルケームの集合表象の一例として、アルヴァックスが集合的記憶を構想しただけではない。ベルクソンの記憶論を主観主義的と批判する中で、客観的な社会学的方法として、集合的記憶の「社会的枠」論を描き出そうとしていた。この取り組みは、アルヴァックスがベルクソン哲学とデュルケーム社会学の差異を明確にして、社会学の方法を科学的に論じようとしたものだと考えられる。

2. 集合的『記憶の社会的枠』

そもそも、アルヴァックスは、「われわれの思い出 (souvenir) は集合的なものであって、たとえそれが、われわれだけが関与した出来事や、われわれだけが見た事物にかかわるものであっても、

他の人びとによって思い起こされるのである」(Halbwachs [1950] 1997 : 52=1989 : 2-3) と述べている。すなわち、ほとんど忘れてしまったような過去の思い出を他者の記憶に助けられて思い出すことが、「集合的記憶」であると言う。

また、その集合的記憶は、歴史との違いによって次のように説明される。

歴史は集団を外部から検討し、かなり長い持続を把握するからなのである。これに反し、集合的記憶とは、内部から見られた集団のことであり、しかもその期間は、人間の生命のふつうの長さを超えることはなく、多くの場合、それよりはるかに短いのである。(Halbwachs [1950] 1997 : 140=1989 : 98)

つまり、歴史が、過去の出来事を集団の外部から長い期間にわたって全体的に把握するものなのであるのに対して、集合的記憶は集団の内部において生じて、歴史に比べて短いものであることがわかる。その集団外部に形成される歴史の成立について、アルヴァックスは次のように説明する。

過去の出来事の全体を唯一の場面に描くように蒐集することは、その思い出を保っている集団の記憶からそれらの出来事を切り離し、それらの出来事が、それが生じた社会的環境の心理的生活と結びついている絆を断ち切り、その年代史的・空間的図式だけを保持することによってはじめて可能なのである。(Halbwachs [1950] 1997 : 137=1989 : 94)

すなわち、アルヴァックスは、「歴史家が特に差異点に対して関心を抱き、類似点を抽象している」(Halbwachs [1950] 1997 : 137=1989 : 95) と述べ、過去の出来事から集合的な思い出を断ち切ること

で、「変化の一覧」(tableau des changements)としての姿を明らかにしたと考えられる。その一方で、集合的記憶は、前面化した類似に注目して、(Halbwachs [1950] 1997: 138-9=1989: 96)、「類似の描写」(tableau des ressemblances)としての集合的な思い出を形成する。したがって、歴史が過去の出来事の差異もしくは変化に注目するのに対し、集合的記憶は歴史が切り落とした類似点に注目していることになる。

ここから、集団内部の視点や、思い出の類似性が集合的記憶を説明するものであることがわかるが、これらのものはどこで担保されているのかが問題になるだろう。ここでは、集合的記憶の「時間的枠」(cadre temporel)と「空間的枠」(cadre spatial)によって、集団内部の視点や過去の類似性が担保されると考えたい(横山 2010)。アルヴァックスは、これら二つの枠を「社会的枠」と総称している(Halbwachs 1925)。

時間的枠とは、ある一人にだけでなく、他の人々もある一つの現象を同時に知覚し、その偶然の一致が規則的の間隔を持って再び現れる「社会的時間」のことである。学生と社会人の生活リズムが異なるように、それぞれの集団に固有の生活のリズムを指している。この場合の時間間隔を類似した慣例的区分の反復として捉え、この区分の「同時性」(simultanéité) (Halbwachs [1950] 1997: 147-50=1989: 106-9)がある集団の成員に共有されるとアルヴァックスは考えた。また、空間的枠は、そこに生活する集団が維持する生活空間のイメージであり、集団の思い出を想起するときに基礎とする場所のイメージを指す(Halbwachs [1950] 1997: 193-7=1989: 163-8)。私たちが我が家に落ち着きを感じるのは、その家族内に類似する空間構成があり、空間的枠はこの固有の空間構成を指していると考えられる。例えば、過去に住んでいた家の家具やその配置、過去に訪れた街の風景、過去に歩いた通りに並ぶ店を想起することで、そこに共に暮らした他の成員との関係がよみがえる

ことがあるだろう。

このように社会的枠を基に集合的な思い出を再構成することから、集合的記憶が集団内部の視点と類似を描写することが明らかになると考えられる。

3. 時間の空間化：ベルクソンからの影響

それでは、これら二つの社会的枠は、ただ同じ集団に属する他者たちが、自分ではなく集団の別の成員が経験した過去の想起に関与することに対して、どのように働いているのだろうか。

アルヴァックスは『集合的記憶』の第3章と第4章において、家族の集合的記憶を例に考察を行っている。第3章は「時間的枠」を中心とした集合的記憶の時間論であり、ベルクソンの「持続」批判となっている。第4章は「空間的枠」を中心とした集合的記憶の空間論だと言える。

その時間的枠論において、家族という集団は夫婦からはじまり、子どもの誕生、子どもの独立によって集団を変化させ、そこに流れる社会的時間を変化させる(Halbwachs [1950] 1997: 184-8=1989: 152-6)、と論じられる。子どもが生まれることで家族は拡大して、それまで夫婦独自の生活リズムが子どもを中心とした生活リズムとなり、新たな時間的枠を生み出すことになる。しかし、それは夫婦集団が新しい家族集団に吸収されたことを意味するのではなく、夫婦の生活リズムに並んで新しい生活リズムが存続する、とアルヴァックスは説明する。

古い時間は新しい時間とならんで、あるいは新しい時間の中にさえ、存続できるのであって、あたかも古い集団が、その実質の中から生まれた新しい集団の中に完全に吸収されることを拒否しているかのようなのである。(Halbwachs [1950] 1997: 184=1989: 152)

また、空間的枠による、家族に関する集合的記

憶も説明される。家族が住んだ家や家具の配列、装飾などの空間的枠が社会的慣習や社会的栄光を想起させるということになる。

われわれを取り巻く物質がわれわれの刻印と同時に他の人びとの刻印をも持っていることは避けられない。われわれの家、われわれの家具と家具が配列される仕方、われわれが生活する部屋の配置の全体、それらはみな、われわれがこの枠の中で頻繁に見る家族員や友人のことを想起させるのである。[中略] 住宅やその内部の様子が安定していることは、集団に対して、その連続性という落ち着いたイメージを強く与えるものである。(Halbwachs [1950] 1997: 194-5=1989: 164-6) [中略は引用者による]

家族が暮らした空間配置が維持されることで成立する空間的枠が、安定的な連続した集合的記憶を示す。確かに、アルヴァックスは旅行などの非日常ではなく、少年期のようにより長い一時期についての集合的記憶に関して、「特に働くのは、時間よりは空間的枠である」(Halbwachs [1950] 1997: 157=1989: 118) ²⁾ と述べる。

それでも、アルヴァックスは、私たちの集合的記憶において頻繁に参照されるのは、約束の期日などの時間的枠であるとも言う(Halbwachs [1950] 1997: 157=1989: 118)。集合的記憶が参照するのは、時間的枠なのか、それとも空間的枠なのか。ここでは、例えば家族に関する思い出は時間的枠によって再構成され、空間的枠によって保存されたい。つまり、まず家族の生活は時間的枠(日付や時期など)によって想起され、その後、継続する空間的なイメージを持って保存されることができ(横山 2010)。

このように持続する時間を日付によって区切ることは、ベルクソンの持続と対比される「時間の空間化」に他ならない³⁾。アルヴァックスは、ベ

ルクソンの持続を批判しており(Halbwachs [1950] 1997: 145-56=1989: 104-16)、むしろ「時間の空間化」を経て、過去を空間的枠に転回しようとしているのではないか。

確かにベルクソンは、私たちが持続を持続として捉えられなくなるのは、「時間の空間化」によるところが大きいと論じている。「時間の空間化」とは、時間、運動、変化などの持続を言語によって表現したり、数値化したりして、その継起を区切ることで変質させてしまうことである。つまり、アルヴァックスは、記憶という持続を時間的枠という「不動の枠(cadre immobile)」(Halbwachs [1950] 1997: 189=1989: 158)によって区切り、「時間の空間化」を行っていることになる。

なぜアルヴァックスは時間の空間化を選んだのか。その上、集合的な思い出が空間的枠へと転回するならば、時間の空間化は自覚的に行われたと考えざるを得ない。ここでは、アルヴァックスが、ベルクソンの持続は個人主義的なものであり、他者とは共有できないと批判したことに注目したい。

私の意識の状態が絶え間なく運動して次から次へと継起するならば、またそれらの状態が何の境界線も持たず、過ぎ去っていく流れの中で停止することもないとすれば、あるいははっきりした輪郭を持った対象が私の意識生活の表面に、浮き彫りになって出てくることなげれば、私は私の持続から外に出ることはできないのである。(Halbwachs [1950] 1997: 152=1989: 112)

つまり、ここで言う「境界線」こそが社会的枠としての時間的枠と空間的枠だと考えられる。そうであるならば、その社会的枠によって、「私の持続」が他者の持続と接触することができるようになり、主観的な意識を他者と共有できるのだろうか。

4. 集合表象としての社会的枠：デュルケームからの影響

ここまでで述べたように、アルヴァックスは「私の持続から外に出る」という観念を、デュルケームの「集合表象」に求めていると考えられる。

デュルケームは、孤立した個人はやむをえない場合には、時間が過ぎ去るものであることを無視し、時の長さを測定できない状態にすることもできるが、社会における生活というものは、すべての人びとが時間と持続について意見の一致を見ており、また自分たちが対象とされる取り決めだということをよく理解していることを意味しているものであると、間違ふことなく見てとっていた。それゆえにこそ、時間についての集合的表象が存在するのである。この時間の集合的表象は、もちろん、天文学や地球物理学上の主だった事実と一致するのであるが、社会はこうした一般的枠に、具体的な人間集団の条件や慣習に特に合致する別の枠を重ね合わせるのである。だから次のように言うことができる。時間の天文学的区分や日付はいろいろな社会的区分によって覆い隠されてしまっているため、漸次消滅してしまい、自然は持続を組織する仕事をしだいに社会に委ねていく。(Halbwachs [1950] 1997 : 134-4 = 1989 : 101)

つまり、アルヴァックスは持続を否定しているのではなく、ベルクソンの持続を、「時間の天文学的区分や日付」という集合表象に重ねることで「時間の空間化」を生じさせ、「社会に委ねて」と考えられる⁴⁾。ベルクソンの持続を、時間の区分という集合表象で「覆い隠す」、もしくはベルクソンの持続に集合表象を重ね合わせることで社会に向かっていく。したがって、アルヴァックスは集合表象として時間的枠や空間的枠といった社

会的枠を構想したと言える⁵⁾。

このことは、ベルクソンの立場からすれば、持続を分断することでしかないかもしれないが、デュルケームからアルヴァックスへの流れは「私の持続から外に出る」方法を示していることになる。デュルケームの集合表象として社会的枠を構想することによって、アルヴァックスは他者と共有される集合的記憶という概念を明確にしたのではないか。

したがって、アルヴァックスは、個人の心理に外在するものと内在するものの混在を認識した上で、個人的な心理の外側にあり、人びとに強いられる拘束力（道徳的な性質）をもった「集合的な実践において表される表象」(Halbwachs [1918] 1967 : 359)、すなわちデュルケームの集合表象を演繹したと考えられる。

確かに、社会的と言われる、心理的事実の起源は、あるいは少なくともある意識の中でのそれらの事実の表象の起源は、当然、その他の人びとの意識の中で見つかることになるだろう。(道徳的世界だけに留めても)それぞれの[意識の]外側にあるものは、その他の人びとの意識である。私たちを強いる集合的と言われる状態を伴う力は、そのような[集合的]状態が多くの人びとに共通するということから生じるのであり、すなわち、諸個人の思惟や信念の一つの総体であるということから生じるのである。(Halbwachs [1918] 1967 : 360) [強調・補足は引用者による]

ここから、アルヴァックスは「私」という個人の外にいる他の人びとも共通する集合的な状態から社会的事実を取り出そうとしていることがわかる。つまり、社会的事実の表象の起源を他者の意識に求めている。

「私」を含めた他者たちの意識の集合となることで、個々の意識には見出せない特性を示すために、

生命体の諸要素には生命はなく物質の移動と生化学反応だけで、窒素や炭素分子からその生命体の特性を見出せないという例が扱われている。部分である個人意識の連合と相互浸透によって、部分とは異なる全体として集合表象という事物が生じることになる (Halbwachs [1918] 1967 : 362-3)。

このように、アルヴァックスは、「社会を実体化すること、社会を実体のレベルに引き上げること、卓越した事物 (chose) を作ること」(Halbwachs [1918] 1967 : 363) というデュルケームの科学的方法を継承したことになる⁶⁾。

5. おわりに

ここまで、集合的記憶の核となる社会的枠 (時間的枠と空間的枠) は、デュルケームの集合表象を引き継ぐ概念であり、他者との過去の共有を集団において説明することを論じてきた。そのことで、社会を実体化するというデュルケームの社会学的方法を、アルヴァックスが受け継いだことになる。

けれども、現段階ではアルヴァックスの社会学的方法に歯切れの悪さも残る。それは、アルヴァックスが集合表象を社会的枠と捉えているのか、それとも集合的記憶もしくは集合的な思い出と捉えているのが明確はないためである。集合表象が集合的記憶であるならば、社会的枠はその集合的記憶の手法を論理整合的に説明できるかもしれない。またデュルケームの集合表象との差異を明確にすることもできるかもしれない。いずれも今後の課題となるが、集合的記憶が集合表象であるだけでなく、その方法論を明確にすることで、集合的記憶は、デュルケームの集合表象としての単なる実証対象ではないことが明らかにできるのではないだろうか。

註

1) 本稿は、JSPS科研費「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か-デュルケーム社会学を事例として」(基

盤研究 (B)、課題番号 : 15H03409、研究代表者 : 中島道男 [奈良女子大学]) の助成を受けており、2015年10月10日奈良女子大学にて開催されたデュルケーム / デュルケーム学派研究会において行った報告原稿を一部加筆・修正したものである。

2) 小関藤一郎訳を参照しているが一部改訳を加えた。intervenirについて、小関訳では「介入する」だが、ここでは「働く」と訳した。

3) ベルクソンは、「空間化された時間」について次のように述べている。

空間の観念に親しんで、それに憑依されてさえているわれわれは、純粋な継起について自分が抱く表象のうち知らぬ間に空間の観念を導入してしまう。かくしてわれわれは、もものの意識状態を、それらが同時に覚知されるような仕方、つまり、もはや一方のうちに他方をではなく、一方のかたわらに他方をとという仕方、併置する。(Bergson 1889 : 75 = 2002 : 116-7)

4) ベルクソンは1926年4月26日にアルヴァックスに当たった手紙で『記憶の社会的枠』について、「思い出の保存と喚起において、私は本質的なものを社会に充てるに至っていない」と記している (Bergson 2002 : 1193)。

5) ただし、アルヴァックスはデュルケームの集合表象を解釈する中で「記憶についての研究は、思い出が物質的実体ではなく、意識の外側に存在しうることを私たちに教えてくれる。」(Halbwachs [1918] 1967 : 363) とも述べている。必ずしも、社会的枠が集合表象ではなく、集合的記憶が集合表象である可能性もある。

6) ナメはアルヴァックスの『労働者階級と生活水準』について「図式はベルクソンのものである。けれども、現実に関する本質的なものとは神や生ではなく、社会なのである」(Namer 2000 : 30)、と述べる。

参考文献

Bergson, Henri, [1889] 1997, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF. (=2002、合田正人・平井靖史訳『意識に直接与えられたものについての試論』筑摩書房。)

———, [1896] 1999, *Matière et mémoire*, PUF. (=1965、田島節夫訳『物質と記憶 (ベルクソン全集第二巻)』白水社。)

Durkheim, Émile, [1895] 1999, *Les règles de la méthode sociologique*, Quadrige, PUF. (=1978、宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店。)

Halbwachs, Maurice, [1918] 1967, "La doctrine d'Émile Durkheim," *Revue Philosophique*, 85 : 353-411.

———, [1925] 1994, *Les Cadres sociaux de la mémoire*, Albin Michel.

———, [1950] 1997, *La mémoire collective*, Nouvelle édition revue et augmentée, Albin Michel. (=1989、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社。)

Namer, Gérard, 2000, *Halbwachs et la mémoire sociale*, L'Harmattan.

横山寿世理、2007 「複数性と不確定性-時間に依拠する自我」『年報社会学論集』20 : 72-83。

———、2010 「アルヴァックス集合的記憶論再考-想起・忘却・保存」『社会学史研究』32 : 75-89。

(よこやま・すずり 聖学院大学人文学部日本文化学科准教授)